

子どもと絵本

百々佑利子



幼児が絵本をどう受容し、評価するかを判断するのは困難です。「もっと（読んで）」という言葉こそ、肯定的な評価であるともいわれます。絵が好きなのか、物語がおもしろいのか、あるいは読み手と一緒にいるのがうれしいのか、その全部がもう一度読んでという要求の理由なのか、きいても、子どもの答えは日々変わることでしょう。自身やわが子と絵本にまつわる記憶は断片的でありがちです。科学的かつ継続的な観察も、知覚面での注意力や集中力

が安定していない乳幼児の知覚および表現の制約を乗り越えるという命題があります。けれどそもそも子どもはみな、注意力、集中力が不安定なのでしうか。

私ができることを考えるようになったきっかけは、およそ四半世紀前に、ポリネシア系先住民の口頭伝承のフィールドワークをするために訪れたニュージーランドでの、ある書物との出会いでした。当時私の関心は、本とは対極にある無文字民族の語りに

特 集

あつたのです。旅の終わりに、子どもの発達と絵本についての研究論文を出版したドロシー・バトラーに会いました。

彼女はリーディング・センターで、本に苦手意識をもつ、就学しても読み書きに苦労している子どもたちに、独自に開発した方法で、絵本のテキストを読むトレーニングを行っていました。私が訪ねたとき、バトラーの論文が『クシユラの奇跡 一四〇冊の絵本との日々』のタイトルで出版されたばかりでした。重い障害をもつクシユラという名の女の子の、誕生から三歳九か月までの成長と、その間に絵本に示した反応の克明な記録です。毎日十五分あるいは三〇分おきに記されたメモをもとに、子どもの成長と絵本とのつながりを解き明かしています。同書は障害児であるなしにかかわらず、幼い子どもとの読書と本に貢献した著作に与えられるエリノア・ファージョン賞(英国)を受賞することになります。

親は、クシユラが生後四か月のときに初めて絵本を見せました。そしてクシユラは「本を見ようとする意志を示し、全身を耳にして」聞きました。八か月から九か月のころ、自分から要求もするようになりました。「お気に入り」の対象物を吟味するときの集中力はすさまじかった」との記録があります。抱かれながらかすかに体をのけぞらせるのは、壁のカレンダーが見たいという意志の表明でした。絵の下に並ぶ黒い数字に目の焦点を合わせ、数字を一つずつ何分もかけて注意深く調べました。

同時期に、絵本を長時間にわたって見せる習慣も定着しました。この習慣は一日二〇時間も抱いていなければならぬ重度の心身障害児をもつクシユラの親にとって、精神的な支えとしても有効でした。本を見せるとき、クシユラの保育にあたった大人(両親・祖父母・叔父叔母・親の友人・近隣の人々)はクシユラを抱っこし、背を胸でしっかり支

え、ずり落ちないようにし、おもて表紙から裏表紙まで読みました。クシユラは、どのページもなめまわすように隅から隅まで見ましたが、絵の何か所に視線がくぎ付けになることもありました。たとえば『かぞえてみよう』²⁾（ブルーナ）の白いページにぼつんと記された数字です。絵を見てほほ笑むわけではなく、「つねに真剣に集中」しました。ところがリズムカルな詩、たとえば『ふくろうとこねこ』³⁾（リア）を読んでもらうとき、読み手の大人が無意識に体をゆするのに合わせて、聞き手のクシユラも神経は集中しながらも弾む気持ち足をの動きで伝えました。好みはしだいにはつきりし、「腕を振ったり足をばたばたさせ」て喜びと興奮の感情を伝えるようになりました。そういう本はどれも何百回も読まれたといえます。

絵本を見せてもらい読んでもらうことは、未だ知らない世界を目（絵）で見て確かめる「代償プログラム」であり、懐に抱かれて愛情のこもった声を聞

く快さの繰り返し体験でした。親子の絆を結ぶのに絵本が大きな役割を果たしたのはいうまでもありません。

そして、クシユラが一歳になったとき、突然、名詞の最初の音（フィッシュの f、ピッグの p）を発音しました。絵を指さしながらなので、大人にも f は魚を、p は豚を意味するとわかりました。一歳半のときのテストでは、無声音を明確に発音することができました。いかに注意深く本の言葉を聞いていたかがわかります。それと同時期、『でも、みどりのおうむはどこにいるの？』⁴⁾（ツアハリアス）の絵の中でおうむを見つけると両手を打ち合わせ、声を立てて笑いました。ただしこの子の場合、興奮や喜びの感情は、親の体にかすかに伝わる動きからそれと理解できる程度であり、手を打ち合わせるのも本当に弱々しくでしかありませんでした。体を密着させて、子どもの体が発する微弱な信号を親が受け止め記録していたからこそわかる変化でした。

特 集

子どもと絵本について、この事例は何を伝えていくのでしょうか。まず、絵や数字も含めた「言語体験」の紹介にふさわしい媒体である絵本の導入時期です。一般的に子どもは生後半年以降に、自力で探検や発見をしようと、体の向きを変えたり、はいはいしたり、つかまり立ちをしたりと、活躍の時期を迎えます。そういった段階にある動き回りたい子をひざの上に抑えつけようとしても無理で、本は玩具と同じ扱いをされるでしょう。まだじっとしている時代、世界がベッドの周りにしか展開していない時代に、絵本の時間を離乳食やミルクと同じように欠かせない日々の営みの一つに入れることは、もし絵本が、そして長じて文字文化が、子どもの生涯に何らかの貢献をすると思えば効果的です。言語の獲得や人間の心情の深い理解以上に大切なことはありません。それが早い時期からの「本と一緒」に過ごす時間」に身につきます。

次に子どもの集中力についてです。事例の子ど

も、クシユラは、四か月のときに、絵本の言葉を強い意志をもって全身を耳にして聞きました。集中力を発揮したのです。数の本を見たから数字や計算を覚えるわけでもなく、リアのユーモアが理解できる（いずれそうなつてほしいが）わけでもありませんが、日々高められる注意力と集中力は、自らの意志の発露にも活かされます。幼いときからの読書は、人間の生涯を支えるのだらうと思います。

クシユラの記録に戻ると、十八か月の章は、「あらゆる障害にもかかわらず、幸せな子どもになりつつあった」と締めくくられます。「よく笑い、ぐあいが良いひとときは楽し」みました。どの子にも与えられるべき幼児時代を過ごすようになったのです。

著者はここで、『五歳前にあたえる本⁵⁾』（D・ホワイト）の、健康で利発な子、キャロルとの比較を試みます。キャロルは、一人称で語られる物語の「ぼく」や「わたし」が誰のことか、大人を質問攻めに

して説明を要求しました。知らない言葉をそのままにしておくことはありません。クシュラのほうは何でも丸ごと受け容れました。キャロルの鋭い知性は「言葉というものは、明確で具体的なものを意味する」と定義し、そのためにノンセンス・ソングは拒否しがちでした。一方クシュラは、何時間でも詩や物語を聞いたがり、ノンセンスな詩の磨き抜かれたリズムに感覚的に反応しました。「つまり」と著者はいいます。「五感に訴え、解説を必要としない言葉や文体を愛する喜びは、厳として存在する：子どもたちの言語感覚は、音楽的感性と同様で、あらゆる方に広い幅があるというのが、確かな真実である」。

二人とも二歳九か月のときに『ピーター・ラビットのおはなし』(ポター)に出合い、「もう一度読んで」と繰り返し愛読書になりました。ピーターうさぎがじょうろに隠れ、耳だけしか描かれていない場面、キャロルは「ほかのところ(体や手足)はど

こ？」と読み手にききました。クシュラは何も言わないので、親から質問してみました。「この中」とクシュラはじょうろを指して言いました。また三歳のキャロルは、腰から下しか描かれていない母親の絵を見て「ママの頭はどこ？」と質問しました。ホワイトはキャロルの反応から、「子どもにとって絵の中にあるものは実在する。絵に描かれていないものは実在しない。だから登場人物の想像の中のものにのみ存在するのは(絵本に)描かないようにしてはどうか」と提案します。しかし、バトラーは享受できないもののほうが多い条件下にあり、「絵に描かれたイメージに集中力をかたむけてきた子ども」のクシュラが、想像力という財産を絵本体験によって与えられたと解釈します。

段階的に成長する子どもに段階的に本を選んで与えるという考え方が概ね共有され、何歳児のときに読む本という勧め方もありますが、飛躍的に開花する可能性もあることを念頭において絵本論も展開さ

特 集

れるべきかもしれません。キャロルに比べて質問をしないクシユラですが、この時期の言語テストでは、結合語や複数形も使い、主語に自分の名前を用いることはなく、姓名や住所を伝えることもできました。言語の発達は順調でした。キャロルは活発な子で、本の出番のない日もありました。しかし幼いときに本の魅力を知った人間は、たとえ本を手にする時期が途絶えても、いつかまた本に戻ってきてきます。キャロルもそうでした。クシユラはもう大人の女性ですが、本から離れたことはなく、手紙や会話の表現には、物語の作者が練りに練った言い回しや比喩が借用され、その豊かな言語活動は周りに集う人々を笑わせ、感動させ、楽しませています。

絵本は、キャロルやクシユラや大勢の子どもたちの人生の質を高めてきました。その上、注意力や集中力や想像力の発達にも重要な役割を果たします。縦断的かつ綿密なこの記録を通じて、すべての子ども

もの成長に当てはめることも可能な、文の言葉や「物語る」絵の受容や評価にかかわる数々のことが明らかにされました。これも、絵本の功績といわなければなりません。

(日本女子大学)

註

- 1 *CUSHLA AND HER BOOKS* by Dorothy Butler, Hodder and Stoughton Ltd., 1979
- 2 *I Can Count!* by Dick Bruna, Methuen, 1968
- 3 *The Owl and the Pussycat*, by Edward Lear, Mowbray, 1970 (1871)
邦訳版 百々佑利子訳 のら書店 一九八四
- 4 *But Where Is the Green Parrot?* by Thomas & Wanda Zacharias, Chatto & Windus, 1965
- 5 *Books Before Five* by Dorothy Neal White, New Zealand Council for Education Research, 1954
- 6 *The Tale of Peter Rabbit* by Beatrix Potter, Warne, 1902